

「存在しない女」の審級 —エウリピデスの『メデア』に寄せて—

春木奈美子

はじめに

コロスの長 …人の履むべき道をも考えて、そんなことはなさらないよう、おとめいたします
メデア …いいえ、ほかに途はないのです¹(第3幕)

エウリピデスの『メデア』の一場面である。この作品は BC431 年にアテネの大ディオニソス祭で初演され、競演のなかでは最下位という評価ながらも、今なおオペラ・舞台・映画等で繰り返し上演され、様々な研究領域にも影響を与え続けている。冒頭の引用は、主人公メデアが子殺しの計画をコロスたちに告げる場面でのやりとりである。コロスの忠告も、もはやメデアの耳には届かない。そこにあるのは情愛深い母親ではなく、「掟」の及ばない領域へと突き進む「女」の姿である。本論文はこの際限のない女、メデアに注目したい。というのもこの物語は、「存在しない」²という問題含みな審級に位置する「女」をめぐる考察に、新たな途を拓くように思われるからだ。まずは『メデア』の粗筋を確認しておこう。

イオルコスの王子イアソンは、王位奪還をかけた難業を課せられていた。アルゴ一号を率い黒海の奥に位置するコルキスに向かうイアソン一行は、コルキスの王に行く手を阻まれ為す術を失うが、王の娘メデアの魔術的な力に助けられ、目的の金羊毛獲得に成功する。一方イアソンに恋をしたメデアは、祖国を捨てイアソンについていく。

一躍英雄となってイオルコスに戻ったイアソンは、またもやメデアの助力により、先王に代わって王の座につくのだが、それも束の間、先王殺しの咎で追放にあう。こうしてコリントスへと逃れた二人であったが、ふたりの子供にも恵まれ、幸せな生活を送っていた。しかしコリントスの王クレオンが、イアソンに目をとめ、自身の娘と結婚させようとしたことから、この平穏は音を立てて崩れていく。『メデア』の物語は、正確にはここからはじまる。

若く美しい娘に、そして何よりコリントスの王の座に惹かれたイアソンは、メデアを捨ててこの結婚を承諾してしまう。母国を捨ててまで尽くしてきた男から突然の裏切りをうけ、怒りに悶えるメデアであったが、既に執り行われた婚姻によって、メデアの国外追放は免れ得ない状況となっていた。そこでメデアは、王クレオンに一日の猶予を請う。そしてこのわずかな間に、王とその娘を毒殺してしまう。

そしていよいよ物語の終盤、メデアはなんと、誰より愛情を注いできた自身の子どもを自らの手で殺害してしまうのである。息子たちを失い、怒りと悲しみの極地に突き落とされるイアソン、その様子を見ろすかのようにメデアは太陽の竜車で去っていく。

『メデア』はしばしば愛欲劇と解される。そもそもイアソンに恋焦がれ、国を捨ててまで(この際メデアは実の弟をも殺している)その男についていったのが悲劇のはじまりであり、メデアはその激しい愛欲のあまり復讐によって人を傷つけ、結局は自分も苦しむことになる。つまり愛欲が制御されないうままつき進めば、最終的には破滅に至らざるをえない、という解釈である。この解釈に従えば、この作品は「結局、物事は中庸がよい」という訓話として読めるだろう。しかし注意しなければならないのは、この物語は度を越えた行為に及んだメデアに災いが起こるといような結末を用意してはいないということだ。子殺しを終えたメデアは、それまでの鬱屈した状態を抜け出し、むしろ意気揚々と空飛ぶ竜車で去っていくのである。以上から、愛欲劇という解釈は誤ってはいないものの十分ではない。

また、メデアという人物に関しては、非ギリシア的、つまりは野蛮な(barbare)女であるとの解釈も一般的である。メデアの祖国コルキスは、ギリシア世界からみれば東の果て(現在のグルジア西部)にあたることから、メデアとはまさに訳のわからぬ言葉を話すアジアの女の形象であるともいわれる。実際、自身の子を殺めたメデアに対してイアソンは「かかる所行をあえてしたのは、ギリシアの女にはかかつてない。」³(終幕)というような言い方をしている。要するに、この劇の中にはギリシア世界に君臨するアテナイ文化の優越性を透かし見ることができるといわけだ。この解釈でいくとメデアは、白痴な女の別名ということになる。しかしながら、メデアは決して知を欠いた人物として描かれてはいない。例えば、クレオンはメデアに追放を言い渡す際、メデアが備える「知」への恐れ、こう告白している。「心配なのだ、(中略)心配というには、いろいろ、わけもある一、そなたは伶俐な生まれつき、さまざまの凶事にも長けた身」⁴(第一幕)。ギリシアの一国の王をしてこう言わしめるメデアを、野蛮で無知な女と解することはできないだろう。むしろ愚行というものがあるとすれば、メデアの知を鑑み一刻もはやい追放を決意していたにもかかわらず、結局はメデアの巧妙な手口にかかり決して与えてはならなかった猶予を与えてしまった王の行為にこそ、その言葉はふさわしい。またこれに加えて、同じやりとりの中でメデアがクレオンを前に零すちいさな告白を挙げておいてもよいだろう。「新しい知識を持ち出せば、もののわからぬ人たちには、役にもたたぬ愚か者と思われましょうし、物識りと名のある人よりも、いっそう賢いなどとは思われては町でも嫌われ者となりましょう」⁵(第一幕)。ちなみにこの台詞は、フランスの精神分析家ジャック・ラカンがアンドレ・ジッドについて書いた論文「ジッドの青春あるいは文字と欲望」(E, 739-764)のエピグラフとした箇所でもある。ラカンもメデアという女性を、むしろ「知を想定された主体」の側に位置づけるような引用の仕方をしていることがわかる。以上から、『メデア』を男性性の優位を逆照射する理性を欠いた女の物語と解することは到底ゆるされない。

このように『メデア』には、既存の解釈の枠組みにはきちんと納まりきれない何かがある。メデア、この「あまりに女性的な」と形容したくなる女の物語のなかで一体何が生じているのだろうか。本論文は、この極めてシンプルなひとつの問いによって貫かれているといってもよい。この単純でありながらも難解な問いに分け入るために、われわれは「女」について極めて独自の理論を展開したジャック・ラカンの精神分析学を参照する。後の章でみていくように、ラカン自身は『メデア』について詳細に論じることはなく、小さな論文のエピグラフに『メデア』からの一節を置いたにとどまる。しかしラカンのこうした書き方、そして女性をめぐる語らひは、困難な問いを携えたわれわれの道標となるだろう。

本論に入る前に、全体の構成を確認しておけば、第一章でまずは、準備作業として1972年から73年にかけて行われたセミナーXXで提示された性別化の図を中心に、「女性」をめぐるラカンの思想をみていく。続く第2章では、ラカンが『メデア』を引用した論文を参照しつつ、メデアの分析に入る。こ

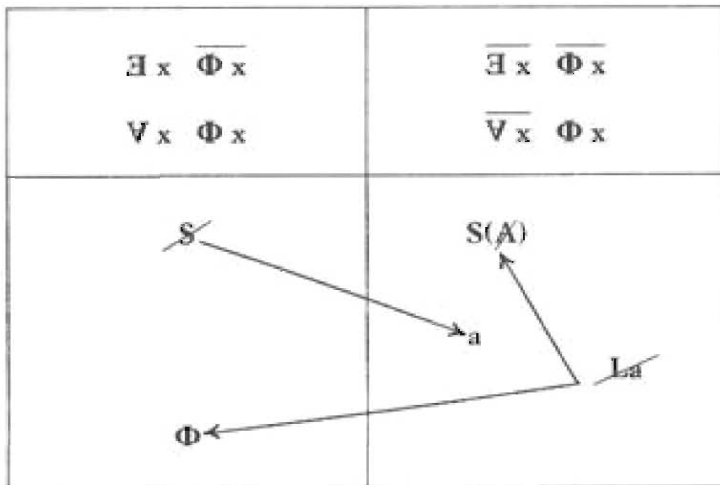
ここでメディアの行為を「真の女性の行為」として浮き彫りにした後に、晩年のフロイトが示した分析の困難に晩年のラカンが示した新たな道として、真の女性の行為から導かれる「症状への同一化」という概念を展望して結びとする。

第1章

ラカンは、女性に関してひじょうに独特で、ともすれば問題視されかねない考えを提示している。なかでも「女なるものは存在しない」というテーゼはファルス中心主義としてフェミニストの批判にさらされてきた。たしかに想像界・象徴界に重きをおく前期ラカンの主張には、一部そのように理解しうる部分があるだろう⁶。しかし象徴界そのものが実は完全ではないことが重要視され、同時に現実界の重みが更に増してくる後期ラカンの理論に至っては、ラカンの思想はそうした批判で斥けてしまえるほど素朴なものではない。この章ではおもに、件のテーゼが分節化されるセミナーを取り上げ、ラカンが「女」について語ったことをみていく。

1-1 男と女

ラカンの主体は、刻みをいれられた主体、欠如の主体である。通常、人は生物学的特徴によって、つまりペニスの有無で、男性と女性とに区別される。しかしラカンの性差は、欠如との関わり方によって決定される。ペニスがあるにせよ無いにせよ、そもそもすべての主体は欠如をかかえているわけだから、欠如との関わり方が性差を決定するといってもいい。ラカンは欠如により親密性を持つ存在のほうを、「女」とみなした。ではラカンがセミナー『アンコール』(1972-73)のなかで提示した論理式およびマテームによって男女がそれぞれどのように示されているのかをみていこう。表の左側が男性、右側が女性である。



(S XX, 73)

① $\exists x \cdot \overline{\Phi x}$

③ $\overline{\exists x \cdot \Phi x}$

② $\forall x \cdot \Phi x$

④ $\overline{\forall x \cdot \Phi x}$

論理式① ファルス関数に従わない要素が少なくとも一つある。

論理式② すべての要素がファルス関数に従う。

論理式③ ファルス関数に従わない要素があるわけではない。

論理式④ すべての要素がファルス関数に従うわけではない。(すべてではない要素がファルス関数に従う)

性別化の論理式において、主体の性はファルス関数によって決定されている。ここにあるファルスは、大文字の Φ で記されるが、これは小文字の ϕ つまり身体から取り除いたり取り付けたりできるようなものとして幼児に想像される想像的ペニスとは厳密に区別しなければならない⁷。ラカンが Φ を「ひとつのシニフィアン」というが、このシニフィアンの導入によって、主体は ϕ であること (being ϕ) から、 Φ をもつこと (having Φ) へと、欲望のモードをシフトさせることになる。所有に花をもたせてやることで、遅ればせながらわれわれの存在はそれとして確認される。もちろんこのシニフィアンは、生物学的な所与に関わらず、男女ともに機能するシニフィアンである。象徴的ファルス Φ の導入による想像的ペニスの抑圧が、去勢と呼ばれるところのものである。

では、この去勢の執行者は誰か。それは、自らはファルス関数の支配の外にある一者、フロイトの神話でいえば自らは去勢を被ることのない「原父」にあたる。公式①は、まさにこの例外者が存在していることを示している。ラカンによれば、複数の要素がひとつの閉集合を形成するには、少なくともひとつの例外が必要である。つまり、全ての要素にファルス関数が成り立つ(公式②)ためには、ファルス関数が失効する一点(公式①)が必要なのである。例えば、法それ自体にはその法が及ばないように、例外があることで、法はその下に「すべて」を統べる普遍的なものとなる。この例外によって、「すべて」としてまとめられあげられた集合が、「男」と呼ばれる。つまり「父の機能」⁸によって、個々の男性はひとつの全体を形成する集合の構成要素として数えることができる。よって男は存在する。

対する右側、女の側には、そうした例外的要素を見つけることができない(公式③)。父は女にとって去勢者ではない。そうなると、ファルス関数とその「すべて」に成立するとはいえない(公式④)。つまり、女性にファルス関数が全く成立しないわけではないが、すべてがそれに従うわけでもない。ここでは先の男性とは違って、ファルス関数によって規定されるような閉集合が存在しないということが示されている。というわけで、ラカンは、普遍性を示す定冠詞(La)をつけて書き表すことができるような「女は存在しない」⁹ といった。

以上みてきた4つの論理式から、例外者によって普遍的な宇宙に住まう男と、その宇宙に亀裂を入れる無限性の化身ともいえる「すべてではない」女のポジションが確認された。次に検討すべきは、それぞれの享楽のあり方である。ラカンのいう享楽とは、快楽などというものはほど遠く、むしろ耐え難い受難であり、それ自体は何の役にもたたないものであり、通常われわれがそこから隔てられているところの

ものである。

1-2 男の享樂と女の享樂

ラカンが、男性の側に主体 S と Φ を書き込み、この Φ に支えられた男性の享樂を、「ファルス享樂」と名づけた¹⁰。それは、ファルスの関数に従う限りにおいて手に入れることのできる制限付きの享樂である。よく誤解されているように、去勢は享樂の禁止ではない。むしろ去勢は享樂を許す(ただし父の法に従うという条件つきで)。父の調律によって法と欲望の絶妙なハーモニーの中に生きる男性的主体の享樂は、ラカンの有名な3組のなかで象徴界と現実界の交わるところに書き込まれる¹¹。

またラカンは、こうしたファルス享樂を「障害物」とでもいう。なぜなら、女性の身体を享樂するより先に「器官の享樂」¹²となってしまうからだ。もちろん「ファルス享樂はそれ自身としてはペニス享樂ではない」¹³が、ラカン自身がマスターベーションをその例にとるような、この「愚か者の享樂」¹⁴こそ、男性にとって「すべて」なのである。

ところで、 Φ というシニフィアンに支えられた男性的主体 S は、ラカンが女性の側に置いた対象 a に向かっている($S \rightarrow a$)。これはまさにラカンが「幻想」としてあらわしたものである。対象 a は男性的主体が到達しようと試みる「欲望の原因」であり、それはかつて自分に属していたもののように感じられ、彼にとっては重大な価値を帯びることになる。対象 a を狙う以上、男性的主体は不完全であるといえるが、それと何らかの関係をもつことで、自分が去勢を免れているかのようにみせかけることができる。

こうした「みせかけ semblant」あるいは幻影こそ、女性が「 $La \rightarrow \Phi$ 」の矢印によって獲得しようと試みるものだ。男性的主体は、この大きなファルスに支えられているようにみえる。女性自身もあの男性的主体のように支えられたい、象徴の法のなかで享樂を手にしたいと望むとき、欲望のベクトルは男性の側にあるファルスへと向かう。これは、既にフロイトが「ペニス羨望」と呼んだところのものだ。このとき女性は、男性そのものでなく、彼を支える大文字の原理を欲望している。とはいえ、もちろんすべての女性がこの Φ との関係をもつわけではない。

では、ファルス関数に還元されない性のポジションを選ぶ主体、つまり女性の享樂とはどんなものか。図の右側、女性の側にある、斜線を入れられた女性的主体から男性の側に越境することなく上方に伸びるマテーム「 $La \rightarrow S(A)$ 」に注目しよう。先にみた身体の享樂の出来損ないの享樂、男性がそれでしかないようなファルス享樂に対して「すべてではない」女性の享樂は、「(他者)の享樂」と呼ばれる¹⁵。この享樂は、ラカンが何人かの聖人を(もちろん生物学的な男女を問わずに)例にあげているように、宗教的恍惚と親和的である。ラカンがベルニーニの彫像聖テレサを挙げ、一目みれば彼女が享樂していることは明らかだが彼女はそれについて「感じる」のみで「何も知らない」¹⁶というように、女を震撼させるこの享樂について語ることはできない。身体と解きがたく密着し、象徴界の外部に位置する(他者)の享樂は、想像界と現実界の交わる部分に書き込まれることになる¹⁷。

更にラカンは、この享樂を、男の享樂に「更に加わる(en plus)」¹⁸ものとして、「追補享樂(jouissance supplémentaire)」¹⁹と呼んだ。ラカンがそう言った後に慌ててそれが「補完的(complémentaire)」ではないと一おそらくは多少なりともユングを意識して²⁰注をふるのは、女性の享樂である追補享樂が不完全な男の享樂(ファルス享樂)を完全なものにするということはない、と強調するためである。ラカンにおいては、女性と男性が愛し合ってひとつになるといったユートピア的な考えはない²¹。女性の享樂が男性の享樂と混じり合ってひとつの全体を形成することはない、享樂は「愛の記号」²²ではない。だからこ

そラディカルな意味で「性関係はない」。

またそもそも、女性の享楽が「ある」ということさえできない。女性の享楽の場を表す $S(A)$ は、「〈他者〉の欠如のシニフィアン」と呼ばれるが、これは「〈他者〉は〈他者〉なし」ということを示している。それは、神がないというのと同じレベルでそうなのだ。〈他者〉は、私の存在についても欲望についても、何も知らない²³。〈他者〉は、場として何ものも有しないし、そこには欠落が在るのみなのである。それゆえ「〈他者〉の享楽は存在しない」²⁴ し、存在することが許されていない。幻想という媒介なしに、存在しないものとしての〈他者〉の方へ向かう女性の享楽は、「無限性によってのみ自らを推し進める」²⁵ という。

以上、男と女のそれぞれのポジション、およびそのふたつの享楽のモードを見てきた。とはいえとりわけ女性の側は、未だ不透明であると言わざるを得ない。というのも、ラカンが「女は存在しない」、その女性の享楽である「〈他者〉の享楽は存在しない」ということで語らぬ糸を断つことはなく、むしろ「女というものが存在するとしたならばそれであり得たであろう〈他者〉の享楽」²⁶ について語ることをやめないからだ。おそらくそれは、ラカンはこの空虚な場に既存の言語構造のなかでは会うことのできない新たな「知」の可能性をみていたからではないだろうか。このような展望のもとで更に存在しない女性の方に切り込んでいこう。

第2章

はじめに述べたように、ラカンは『メデア』について直接論じることはなかったが、アンドレ・ジッドについて書いた論文「ジッドの青春あるいは文字と欲望」²⁷ のエピグラフに『メデア』からの一節を引いている。『メデア』の分析に入る前に、この論文の後半に記された、ジッド夫婦間に起こったあるひとつのエピソードに注目したい。というのもこうした迂回は、男と女、そしてそのふたつが互いにどういう関係にあるのかを明確にすることで先に1章でみてきた性別の論理を肉付けしてくれると同時に、『メデア』の謎を解く鍵を与えてくれるからだ。では、まずはジッドの『日記』²⁸ を紐解きながら件の出来事を辿ってみよう。

2-1 手紙、あるいは子ども

ジッドと彼の生涯の妻となる従姉マドレーヌの間には、出会いのときより、何通もの手紙が取り交わされていた。ジッドが後に、「これ以上美しい書簡はなかった」²⁹ と語るその手紙は、壮麗な愛の言葉で満ちていたのだろう。その訝えは疑うまでもない。しかしある日、ジッドの長い留守中—それは愛人男性との旅行であるのだが—、広い家に一人残されたマドレーヌはジッドに宛てられた一通の手紙を読んでしまう。これによって彼の性的傾向のすべてが明らかになる。その後、マドレーヌは30年間にわたって自分が受け取ってきた愛の手紙のひとつひとつを読み返し、そのすべてを燃やしてしまう。ジッドの同性愛、夫婦間の性交渉の不在など、マドレーヌをそうした行為に駆り立てた理由は、いくつでもあげられるかもしれない。しかし、なぜと問われたマドレーヌはこう答えるのみである—「何かをせずにはいらなかった」³⁰ と。

「自分のなかの最高のもの」³¹ を入れ込んだ手紙が、妻の手によって焼かれてしまったことを知らされたジッドは、悲しみに打ちひしがれる³²。それは彼にとって「あたかも彼女が私たちの子供を殺してしまったかのような」³³、そんな出来事であった。これに対してマドレーヌは「気高さに欠ける」³⁴と述べただけで、彼の嘆きほぼ無視したような態度をとりつづけたという。

ラカンが、論文「ジッドの青春あるいは文字と欲望」の中で注目するのは、この燃やされた手紙はマドレーヌ自身にとっても「大切なもの」³⁵だったという点である³⁶。その上で、これを燃やしたマドレーヌの行為をラカンは「女性の行為、真の女性の行為」³⁷であると形容する。幾分唐突に書かれたこの箇所を、前章で性別の議論をみてきたわれわれは、セミナー 20 巻を下敷きにして遡及的に読み解くことができる。

先に示した表に戻ろう。 S の位置に男性的主体＝ジッドを置くと、その欲望の原因である対象 a は女性＝マドレーヌの側に位置する ($S \rightarrow a$)。しかし注意しなければならないのは、ジッドが愛するのは、女性＝マドレーヌ夫人そのものではないということだ。みてきたように「女性は存在しない」。しかしそれは女性という場が存在しないという意味ではなく、その場が本質的に空位であることを示している。この欠如を隠すため、そして同時に女性を創り出すために、男性的主体はこの虚無にペールをかけ、そこに自身の幻想を映し出す。表面は、表面であるがゆえに、いつまでたっても深層に辿り着くことがない。ジッドは宮廷愛にも比すやり方で、この表面に美しい愛の詩を綴る。このとき対象 a は「存在の似姿 *semblant d'être*」³⁸として、あたかも完全ではない自分の存在 S の詰め物となってくれるように感じられる。これにより欠如は否認され、自らを英雄的主体とみせかけることもできよう。

このように、ジッドは夫人そのものではなく、ジッド自身が惚れ惚れするような愛の言葉で飾られるべき「女」を愛しているにすぎない。しかしそれでも女が、その位置で「愛される」ことを望むとき、つまり自分自身ではないところで愛されるとき、彼女は彼の幻想の内に取り込まれることになる。男性の幻想との癒着部分にあるのが「手紙＝子ども」である。

マドレーヌにとってこの「手紙」は、「あなたはわたしの妻である」という自身の存在証明となる。こうして「存在しない」という不安定なポジションは保留され、このときまさに彼女は「母として」実在することになるといえよう³⁹。だからこそマドレーヌにおいて手紙は大切な所有物であった。この意味で、女性の側から男性の宇宙を支える Φ へと向かう矢印 ($La \rightarrow \Phi$) は、男性の幻想構築への隠微な共犯関係を示しているのである。

しかしこの捻れた平衡状態は続かない。彼女は手紙を焼いてしまう。「手紙＝子ども」を破壊するということは、ジッド自身の「分身 *redoublement*」を遺棄すると同時に、彼女にとってのジッドに愛されているところの自分自身の存在証明を放棄することを意味する。このとき何が生じるのだろうか。

2-2 マドレーヌ、あるいはメディア

われわれは「手紙(文字)＝子ども」を a に位置づけた。先の表の中では、 a は $S(A)$ のちょうど真下に書かれているが、ラカンはこのふたつにしばしば混同が生じることを指摘している⁴⁰。この混同によって、 $S(A)$ つまり女性の享楽への途は封じられている。しかしマドレーヌが、愛の手紙が文学作品の断片でしかないことに気づき、「子どもというこの a という栓」⁴¹ を $S(A)$ から引き剥がすとき、それまで不在にしていたところの「(他者)の享楽」への途が拓かれる⁴²。目の前の他者の幻想との癒着部分を引き裂くことは、自身の身を切断することであると同時に、それを可能にしていた(他者)のディスクールの外に出る

ことでもある。このとき彼女は、言語的秩序の外部、現実界という不可能な領野へと進む。こうして存在しない〈他者〉の享楽に接近するとき、「真の女性」が現れるのである。

男性の側へと越境することなく女性の側だけで生じうるこの惨劇に、男性主体の理解は及ばない。それどころか、ファルスが支える普遍性の宇宙のなかで微睡む男たちにとって、この破壊的行為は、脅威でしかないだろう⁴³。ラカンは、マドレーヌの行為を見抜けないジッドの様子を記述したすぐあとに「…哀れなイアソンは、メデアに気づかない!」⁴⁴という一文を、前文に反響させるかのように挿入している。この幾分唐突な記述が示唆するのは、マドレーヌとジッドの間に取り交わされた「手紙」が焼かれたこと、メデアとイアソンの間に生まれた「子ども」が殺されたこと、このふたつの出来事の相同性である。

メデアに戻ろう。彼女はこれまで殺人を反復してきた。まずイアソンに恋焦がれて、家族と祖国を捨てイアソンとともにコルキスを逃亡する際、父王の追っ手が遺体収集に手間取るように、自分の弟を八つ裂きにし、その肉片をまき散らした(第一の殺人)。また、イアソンの母国イオルコスに着いてからも、王の座をなかなか譲らないペリアデス(イアソンの叔父)を、その娘たちを騙し煮えたぎる鍋の中に放り込ませた(第二の殺人)。これによって、イアソンは王になるのだが、それも束の間、王殺しの罪で彼らはコリントスに亡命する。見知らぬ地で、それでもメデアはイアソンとともに平穏な十年を過ごした。

しかし殺人は終わらない。イアソンの裏切りにあい、怒れるメデアは、毒を仕込んだ贈り物によってイアソンの新妻(クレオンの娘)を殺害し、同時に娘にクレオンをも殺してしまう。(第三の殺人)。そしてメデアの物語においては最後の殺人となる、子殺しがある。

最初の3つの殺人は、何らかの政治的な動機を想定できるのに対し、われわれが注目する最後の子殺しには、そうした類の理由を見つけることができない。確かに殺人は反復されているが、最後の子殺しには、明らかに先の3つとは区別される断絶がある。これがわれわれの抱いていた謎であった。しかし今やこういうことができるだろう。

この不可解な殺人が意味するのは、マドレーヌの手紙と同じく幻想との癒着部分の切断である。ここでメデアは、欠如を穴埋めするものとしての子どもを所有する欲望、そしてこれまでのファルスレベルにおけるあらゆる欲望を最もラディカルなやり方で放棄したといえる⁴⁵。幻想を引き裂く行為のなかで、これまでの欠如を補うような所有というあり方「 $L\dot{a} \rightarrow \Phi$ 」から、欠如そのものに同一化する途「 $L\dot{a} \rightarrow S(A)$ 」を行くとき、メデアは真の女となったのだ。

実際、この行為によってメデアは存在を窒息させるほどの苦悩から解放される。もはやメデアはみせかけでしかないファルスを追い求めることはない。いまやわれわれはこう結論することができる。メデアの行為は、あらゆる可能な同一化(「王の娘」、「英雄の妻」、「息子の母」であること)が失敗した後、名を欠いた主体が、狂気の淵において駆り立てられる最後の同一化であったのだ。まさに「ほかに途はない」。

おわりに

晩年のフロイトは「終わりなき分析と終わりある分析」(1937)のなかで、分析治療がぶつかる困難を治療がもうそれ以上先に進まない「固い岩盤」と表現した。去勢に由来するこの障害は、男性における「去勢不安」、女性における「ペニス羨望」にあたる。既にみてきた表に照らせば、それぞれのコンプレクスは、ファルスに極性化された「 $S \rightarrow a$ 」および「 $L\dot{a} \rightarrow \Phi$ 」に対応する。では、女性の側にもうひとつ残る

矢印「 $La \rightarrow S(A)$ 」、メディアを取り上げるわれわれがとりわけ注目してきた女性の享楽、あるいは真の女性の行為は何を示唆しているのだろうか。そこに解かれ得ない主体の苦しみとしての去勢とはまた別の、治療の出口をみることはできないだろうか。

臨床においては「なにかが欠けている」といった訴えに出会うことがある。われわれはここで存在の次元にまでもどらなければならない。なぜなら欠如とは存在の欠如に他ならないからだ。根本的な存在の欠如は所有では埋まらないどころか、欺瞞を増幅させてしまうのみである⁴⁶。もし欠如を前に所有以外の途があるとすれば、それは欠如そのものへ向かうことになるだろう。このとき逆説的にも、欠如は欠如でなくなるのである。もちろん急いで注をつけておけば、これは全き存在者になるということではない。穴はネガティブなたちでしか存在しない。所有者でも存在者でもないこのポジションをラカンは「真の女」の行為とみなした。

ラカンにおいて分析の終わりは 60 年代に「幻想の横断」という形で提示されている。しかし晩年になると「症状」という概念の再考から、これとは別の可能性として「症状への同一化」⁴⁷を提案しはじめる⁴⁸。普段われわれが臨床で出会う症状とはしばしば複数である—また分析過程のなかで必然的に生じてくる転移による症状がそれに合わされば、その数は無限に増幅しうる—にもかかわらず、「症状への同一化」という概念のなかでいわれている症状は単数形である。つまりそれは、諸々の症状ではなく、分析を終える主体がその出口において獲得する唯一のものである。そうした症状はもはや解釈されうるものではない。それは浮遊する世界を新たに繋ぎ留め、主体の崩壊を食い止める語ることの不可能な補填である。欠如の欺瞞的補充とは厳密に完全に区別されるこの補填は、去勢に対するその個人特有のこたえといえるだろう。

存在しない女性が、幻想空間から離脱し⁴⁹、存在しない〈他者〉の空虚に対峙する「真の女性の行為」の瞬間は、新たな主体化の時間であると同時に脱—主体化の時間でもある。なぜなら症状の中で自らを「私は私の症状である」と認識する主体とは、もはや欠如の主体ではなく享楽の主体であるからだ。確かにそれは狂気に接する途でもある⁵⁰、しかし享楽は沈黙を守らない。「何かをしなければならなかった」、マドレーヌのその言葉にあるように、存在の崩壊の手前で、女は何かに駆り立てられるかのごとく行為へと移行する⁵¹。そして精神分析は、主体が症状の享楽に拓かれる場を提供しうるものだ。〈他者〉の庇護のもとにない、狂気めいた享楽、だからこそラカンはこうした女性の享楽を「最も孤独な=特異な *singulière* 享楽」と呼んだのではないだろうか⁵²。

参考文献

- Jacques Lacan, *Encore, Séminaire XX(1972-73)*, Paris, Points, 1975
Le Sinthome, Séminaire XXIII(1975-76), Paris, Seuil, 2005
 «Jeunesse de Gide ou la lettre et le désir» in *Ecrits*, Paris, Seuil, 1966
 Jacques-Alain Miller, «On Semblances in the Relation Between the Sexes», in *Sexuation*, Edited by Renata Saleci, Durham NC, Duke University Press, 2000
 Colette Soler, *Ce que Lacan disait des femmes, Étude de psychanalyse*, Paris, In Progres, Éditions du Champ lacanien, 2003
 Sigmund Freud, 「終わりある分析と終わりなき分析」(人文書院『フロイト著作集』第 6 巻、1970 年)

凡例

- ・ラカンの大文字で綴られるところの他者に関しては、〈他者〉と標記している。
- ・ラカンの *Séminaire* からの引用については、S と略し、その後にローマ数字で巻数を示した。なお SXX については、Seuil のポケット版 Points を参照している。
- ・ラカンの *Écrits* からの引用については、E と略した。

1 『ギリシア悲劇全集Ⅲ エウリピデス(上)』(中村善也訳)ちくま文庫、1986年、114ページ。

2 「女は存在しない」とは、ラカンが SXX において繰り返すテーゼのひとつである。

3 前掲書、139ページ。

4 同書、88ページ。

5 同書、89ページ。

6 ラカンの思想には時期を経て様々な転換があったが、セミナー「精神分析の四基本概念」が行われた1964年を境に、想像界・象徴界から、現実界へとアクセントが置かれたと考えるのが一般的である。しかしこれは、想像界・象徴界の重要性が薄れたという意味を少しも含んではない。

7 母に欠けたもの(- ϕ)の位置に幼児が自らの存在を ϕ として捧げるような母子一体状態があるとすれば、そこに切断を入れるのが父である。欠如のない充足状態はときに完全な理想型と夢想されることもあるが、象徴的平面が拓かれることを許さないという意味で、非常に危険な窒息状態でもある。そうすると父の禁止 non de père は、その否定的な言葉の響きとは裏腹に、主体に人間としての生を吹き込むという肯定的な側面をもっていることがわかる。つまり禁止によって、あったはずの一体状態は喪失されるが、父の名 nomdepère のもとに壮大な言語の世界が広がることになる。

8 SXX,101

9 一人々の女は確かに存在するが、女性なるものは存在しない。だからこそ女性性、女性につく定冠詞 La に斜線を引いてあらわされる。

10 ラカンは Φ を「男においてファルス享樂を引き受けているところのもの」と言い換えている(SXX,75)

11 SXXIII,55

12 SXX,15

13 SXXIII,56

14 SXX,103

15 SXX,14

16 SXX,97

17 SXXIII,55

18 SXX,98

19 SXX,94

20 ユングの「補完性」という概念のもとでは、全体性の回復が想定される。

21 二つに分かれたものが新たな一となる「止揚のプロセスは、哲学者の夢」SXX,108である。

22 「〈他者〉の享樂、〈他者〉を象徴化する〈他者〉の身体の享樂は、愛の記号 signe ではない」SXX,11。ちなみにラカンにとって「愛とは記号」である SXX,25。

23 SXX,125

24 「〈他者〉の〈他者〉は存在しない。それゆえ〈他者〉の享樂もまた存在しないことになる」SXXIII,55-56

25 SXX,15

26 「女というものが存在するとしたならばそれであり得たであろう〈他者〉、そうした〈他者〉の享樂と

いう不透明な場にこそ、至高存在 Êtresupême は位置づけられる」SXX,105

²⁷ E,739-764

²⁸ André Gide, *Journal I 1887-1925*, Paris, Gallimard, Pléiade, 1996.

²⁹ *Ibid.*, p.1076.

³⁰ *Ibid.*, p.1075.

³¹ *Ibid.*, p.1075.

³² ジッドがマドレーヌの行為を知るのは、1918年11月21日のことである。当時書きつつあった作品のために昔の記録を探そうと、手紙を入れた引き出しの鍵を求めたジッドに、マドレーヌは自分の行為を告白する。するとジッドは「私の最上のものが」失われたと嘆き、一週間泣き続けた。一方マドレーヌはそんなジッドを慰めるどころか、彼から目をそらしたまま日々の仕事を続けた。

このときのことをジッドはこう綴っている。「私が泣けば泣くほど、私たちはお互いに見知らぬ者同士になっていった。私はそのことをつらい気持ちとともに感じていた。やがて私は、失われた手紙のことよりも、むしろ私たちのこと、彼女のこと、私たちの愛のことを泣いていた。愛が終わってしまったことを私は感じていた。私のうちのすべてが崩れ落ちていった、過去、現在、そして私たちの未来が。」(*Ibid.*, p.1075)

³³ *Ibid.*, p.1075.

³⁴ E,761

³⁵ *Ibid.*, p.1075.

³⁶ E,761

³⁷ E,759

³⁸ SXX,121

³⁹ 「女は母としてしか実在しない」 SXX,126

⁴⁰ SXX,105

⁴¹ SXX,47

⁴² もちろん、この途が女性にとって「すべてではない」。

⁴³ その行為は、男性的主体の側に永続的な効果を残す。ラカンも注目しているように(E,758)、マドレーヌの死後に書かれた作品のタイトル「今や彼女は汝のなかにあり Et nunc manet in te」という詩句は、死んだ者への哀悼の言葉ではなく、生き残った者に課せられる永遠の罰の言葉である。この詞句が示唆するのは、「女が何らかのよい思い出として心にいつでも残っている」、ということではなく「存在に穿たれた穴として残り続ける」ということだ。ラカンいわく「彼の嘆きは、ただまさに女の行為が彼女の燃え上がる魂の火の中へと一通一通ゆっくと手紙を放り込みながら彼の存在のただ中に穿とうとした穴をうめているだけにしか見えないのである。」(E,761)

⁴⁴ E,761

⁴⁵ 所有の一切を犠牲にするこの行為こそ、ラカンが「欲望に譲らない」というところのものだ。逆に際限のない所有の欲望は、むしろ欲望への譲歩である。

⁴⁶ 「ほどよい母親」の概念で知られるウィニコットなら、欠如を前にして、「十分満たしてやればよい」というアプローチをとるだろう。しかし、その欠如が存在の深淵に起因する欠如であるとしたら、「十分に満される」ということは永遠に望めない。この構造を見抜かぬまま、欠如を訴える患者の要求に応えようとする治療者は、いずれ枯渇してしまうだろう。

他方、そうした貪欲の凄まじさを見抜いていたのは、メラニー・クラインである。クライン派の臨床的プロセスは、外部からの脅かしと思われていたものが、実は患者自身の貪欲さが投射されたものであることへの気づきにある(妄想分裂態勢から抑鬱態勢への移行)。なるほど妄想分裂態勢の生々しさをとらえる感性においてクラインは天才だが、最後に抑鬱の出口として「感謝」で閉じる部分には、キリスト教的な予定調和の色合いが否めず、無意識という個人の個別的な部分に対する視点が最後の最後に削がれているといわざるをえない。

⁴⁷ 分析の終わりが「同一化」というのは、奇妙に聞こえるかもしれない。しかしここでいう同一化とは、自我心理学においてみられるような、分析家への同一化とは明確に区別される。分析家が理想として崇められ、同一化の対象となるような過程は、もはや分析とはいえない。また症状に同一化するといっても、それは、元々もっていた自身を苦しめる症状をそのまま受け入れる、「現実をありのまま受け入れる」というようなアプローチとも厳密に区別される。

⁴⁸ 象徴界から現実界への強調のシフト、言い換えれば、すべてを統べるようにみえる〈他者〉が実は構造的な不完全さ抱えた穴のあいた〈他者〉であったという点への強調の移動が、前期ラカンから後期ラカンの中に認められるとすれば、その強調をさらに押し進めた形で提出されたのがこの概念である。「サントーム」、および「症状への同一化」の詳細については稿を改めて論じる。

⁴⁹ これとは反対に、「心理学は、 $S(A)$ と a との分離の未遂」(SXX,105)であって、それに基づく実践は「現実はこのもの、結局は幻想にすぎない」という結論にいたる。ここが精神分析と心理学が区別される点である。精神分析はそうしたシニシズムに浸ることはなく、いわば、そうした現実よりもより現実的な(現実)のほうへと向かう。

⁵⁰ 「身体としてとらえられた〈他者〉の享樂は常に不適切 *inadéquate* である。それは、一方においては対象 a へと還元された〈他者〉として倒錯的であり、他方においては、私なら狂気じみたというだろうが、謎めいたものである」SXX,183。

⁵¹ 「行為への移行」としてメディアの行為を読み解くことも本論と矛盾しない。この概念の詳細については拙論「逃げる身体、墮ちる身体」(『身体の病と心理臨床』創元社、2009)を参照。

⁵² SXX,120

(日本学術振興会特別研究員 心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿2009年9月7日、改稿2009年11月30日、受理2009年12月11日)

Instance of Woman Who Does Not Exist : For Euripides Medea

HARUKI Namiko

The end of analysis is one of the questions that have been discussed since the beginning of psychoanalysis. Freud took a negative position, saying that there is a rock of castration beyond which analysis would go no further. Contrary to Freud, late Lacan takes a radical step with the concept of “Identification with symptom”. At first, Lacan accented the Symbolic and defined the traversing fantasy as issues of analysis. Later, as the Real takes on importance in his theory, the identification with symptom is repeatedly emphasized. This theoretical turn results from his original reflections on femininity. The concepts of femininity and enjoyment around his famous thesis “Woman does not exist” are articulated by examining two acts : Medea’s murder of her own children and Gide’s wife’s burning of his letters. These two acts are homologous in terms of the woman who does not exist, or the true woman. Another possibility of cure emerges in the identification with symptom.